

鑑賞における *Tempo rubato* の感知に関する研究

三 宅 靖

(愛媛県松山市立三津浜中学校)

田 邊 隆

(音楽科教育研究室)

(平成11年10月21日受理)

On the Perception of *Tempo rubato* in Terms of Appreciation

Yasushi MIYAKE and Takashi TANABE

1 はじめに

今日、メディアの発達により多種多様な音楽が巷にあふれ、ますます多様化の様相を呈してきている。CD や MD によって、手軽に音楽に親しむことができるようになったほか、街角に行けば様々な音楽が流れている。また、コンピュータの発達により、電子音楽による自動伴奏が可能になるなど、演奏の在り方も随分変化してきた。このような音楽環境の変化により、子ども達は、音楽に対する感覚が、以前より優れてきているのだろうか。

このことを考察してみると、現在あふれている音楽に疑問を感じずにはいられない。なぜならば、我々が耳にする多くの音楽は、カラオケの伴奏に代表されるように、いろいろな要素の変化に乏しい電子音楽だからである。この変化の乏しい音楽にいつも接していることにより、子ども達の音楽感覚に歪みが生じていないだろうか。

音楽は多様な強弱や音色の変化のみでなく、音符通りの長さに演奏しない *Tempo rubato* のような微妙な表現に、演奏家の特徴が現れるとともに、芸術性が感じられることが多い。そして、定規で測ったような演奏ではなく、機械が表現し得ない、いろいろな要素の微妙な変化を感じさせてくれるような演奏にこそ、芸術的な意義があると考えられる。しかし、普段テンポの微妙な変化に乏しい音楽に接することの多い現代の子ども達にとっては、*Tempo rubato* のような表現に、違和感を感じるかもしれない。

芸術表現を単に *Tempo rubato* の視点のみで評価し得ないことは自明の理である。しかし本研究は、あえて子ども達のテンポ感に視点を絞り、調査を行い実態を把握するとともに、特に中等教育における鑑賞教育の在り方について考察するものとする。

2 鑑賞活動における *Tempo rubato* の視点

2-1) 鑑賞活動における課題

学校教育の中の音楽教育において、鑑賞活動はややもすると軽視される傾向にある。学習指導要領の改訂により音楽科授業の時間が減少する中では、音楽学習が特定領域に偏る懸念が生じる。しかし音楽や総合学習両者の立場から考えてもバランスのとれた学習活動を展開することは大変意義深いことである。音楽を聴き分ける鑑賞の力をつけることは表現などの音楽活動にも生かされ、生涯にわたって音楽を愛好し音楽に関わっていく上で役に立つことであろう。

さて、日頃の鑑賞の授業を通して感じてきたことの一つとして、子ども達の鑑賞の仕方が皮相的ではないかということがあげられる。音量が大きいと良い演奏だと感じたり、ヴィルトゥオーソとは異質の、単に速く演奏されたものに感嘆したりする。すなわち、音楽性があるかないかという微妙な違いを感じ取ることができない子どもが多くいるように思える。

そこで、本研究は、音楽性の微妙な違いの中からテンポ感を取り上げ調査を行い、子ども達の音楽に対する感性の傾向を知るとともに、鑑賞教育の在り方について考察を試みた。

2-2) テンポ感と *Tempo rubato*

曲を演奏する際に、どのようなテンポで演奏するかということは、昔から多くの音楽家達を悩ましてきた。「レーオポルト・モーツァルトは、テンポ・ジュストを理解していることが完全な音楽家であるための必須条件」とあるように⁽¹⁾、テンポの決定は音楽的に奥深い問題があるものと思われる。これが、*Tempo rubato* という問題になると、さらに音楽家の芸術性が問われることになることは想像に難くない。

Tempo rubato はきわめて古くからみられる演奏の概念であり、古くから用いられてきたが、作曲家として *Tempo rubato* の指示を用いたのは F. Chopin が最初である⁽²⁾。特にロマン派の作曲家の作品を音楽的に演奏するには、ロマン的心情の表出のために *Tempo rubato* は不可欠だといえる。従って、ロマン派の作曲家の曲を演奏する際に、*Tempo rubato* をしないで一定のテンポで演奏するということは非音楽的であるといえる。

2-3) 調査のための選曲

調査にあたっては、主に F. Chopin の曲を取り上げた。F. Chopin の曲を芸術的に演奏するに際しては、*Tempo rubato* 奏法はなくてはならないものであり⁽³⁾、*Tempo rubato* 奏法に演奏家の特徴があらわれるからである。調査に取り上げた曲は F. Chopin の曲の中でも、演奏家によって *Tempo rubato* 奏法に大きな違いがみられるものである。演奏者の選定にあたっては、古い時代の演奏家から比較的新しい時代の演奏家までまたがるようにし、演奏のスタイルや個性の点においても幅がでるように配慮した。

なお、アンケート実施に際しては小・中学生の理解を優先し、「テンポのゆれ」という言葉で代用した。

3 調査方法

3-1) 対象

小学校、中学校、大学に調査を依頼し、アンケートを実施した。実施したものを集計し分析していったが、ほとんど何も書かれていないものや、同じ数字を羅列しているようなものについては除外した。データ数のうちの有効回答数とは、それらを除外した数である。各校のデータ数は(表1)の通りである。

(表1)

校種	学 校 名	データ数(有効回答数)	調査年月日
小学校	北条市立北条小学校	240(236)	1999年7月13~16日
小学校	松山市立素鷲小学校	82(80)	1999年7月12~13日
中学校	北条市立北条北中学校	518(514)	1999年7月12~16日
中学校	北条市立北条南中学校	330(318)	1999年7月12~16日
中学校	川内町立川内中学校	103(103)	1999年7月12~17日
中学校	久万町立久万中学校	129(127)	1999年7月12~16日
中学校	松山市立三津浜中学校	210(207)	1999年7月12~16日
大学	愛媛大学教育学部(一般生)	143(143)	1999年7月26日
大学	愛媛大学教育学部(音楽専攻生)	19(19)	1999年7月28日

3-2) 内容

アンケートは、小学生用、中学生用、大学生用の三種類を作成した。それぞれの違いは言葉の表現の仕方のみで、内容としては同一である。(様式については、末尾に添付した。)アンケートのそれぞれの質問項目の内容は次の通りである。

①質問項目【1】(以下【 】については、アンケートの質問項目を指すものとする。)

所属するクラブ、部活動(小・中学生のみ)、音楽歴、好きな音楽の種類、最近よく聞いている曲

②質問項目【2】

同一の演奏を選ぶ。

③質問項目【3】

No1からNo4の曲(3-3参照)において、

問1) 曲を知っているか。

Artur Rubinstein, Vladimir Ashkenazy, Vladimir Horowitz, Alfred Cortot の演奏、そしてピアノの自動演奏⁽⁴⁾を提示し、それぞれの演奏について、

問2) どのくらいテンポをゆらしているか。

問3) テンポのゆらし方がどのくらい上手だと思うか。

問4) 演奏の仕方がどのくらい好きか。

問1については、「1. 知らない, 2. 聞いたことがある, 3. 曲名や作曲者を知っている, 4. 演奏したことがある」の中から選ぶ。問2は3段階, 問3・問4は5段階で評価する。

ピアノの自動演奏は、No 3, No 4 の曲においては全くテンポをゆらさず、機械的に演奏させたものである。No 1, No 2 においても、音楽が次の場面に移る前に *ritardando* (No 1 は約 14%, No 2 は約 8%) をかけるようにしたが、それ以外は全くテンポをゆらしておらず、これも機械的な演奏である。このように、ピアノの自動演奏は明らかに非音楽的な演奏となるように意図的に作成した。

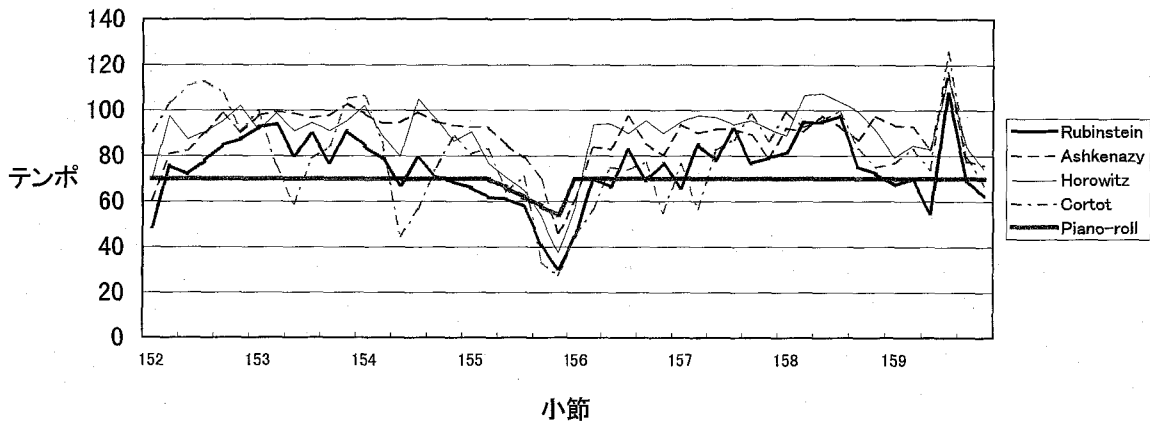
3-3) 使用した曲及び Disk

3-3-1) 各演奏家と自動演奏の比較

各演奏家の演奏と自動演奏の演奏がどのように違うか、下に例を示した。

〈グラフ1〉

Polonaise No.6 テンポの変化 (152小節～159小節)



3-3-2) アンケートに使用した曲⁽⁵⁾

質問項目【2】(F. Liszt) ハンガリー狂詩曲第2番嬰ハ短調170小節～185小節

質問項目【3】(1) (F. Chopin) ポロネーズ第6番変イ長調152小節～159小節

この楽譜は、ショパンのポロネーズ第6番の152小節から159小節までの断片を示しています。楽譜は変イ長調、3/4拍子で記譜されています。右手は複雑な十六分音符の動きを特徴とし、左手はよりリズム的かつ低音域の動きを担っています。演奏上の指示として、*cresc.*、*tr*（トリル）、および *ff*（フォルティッシモ）が用いられています。

質問項目【3】(2) (F. Chopin) バラード第1番ト短調198小節～207小節

この楽譜は、ショパンのバラード第1番の198小節から207小節までの断片を示しています。楽譜はト短調、3/4拍子で記譜されています。右手はよりメロディックな動きを特徴とし、左手は低音域で力強い動きを担っています。演奏上の指示として、*fz*、*p*、*cresc.*、*poco ritenute*、*molto cresc.*、*il piu forta possibile*、および *ff* が用いられています。

質問項目【3】(3) (F. Chopin) 幻想曲へ短調294小節～309小節

この楽譜は、ショパンの幻想曲の294小節から309小節までの断片を示しています。楽譜はト短調、3/4拍子で記譜されています。右手はよりメロディックな動きを特徴とし、左手は低音域で力強い動きを担っています。演奏上の指示として、*sempre f*、*sempre cresce.*、*e piu animato*、および *fff* が用いられています。

質問項目【3】(4) (F. Chopin) ノクターン第2番変ホ長調 1小節～4小節



3-3-3) アンケートに使用した DISK

(表2)

No.	曲名	演奏者	型番	録音年月
	ハンガリー狂詩曲第2番 嬰ハ短調 (F. Liszt)	Alfred Cortot	PHCP-20585/6	1926.12
		Roberto Szidon	423 925-2	1972
		Samson François	TOCE-8817	1953 or 1954
1	ポロネーズ第6番変イ長調 Op. 53 (F. Chopin)	※Martha Argerich Artur Rubinstein Vladimir Ashkenazy Vladimir Horowitz Alfred Cortot	PNCD 003 PHCP-20539/40 F00L-29027 BVCC8969/70 TOCE-7820	1965 1964.3 1984 or 1985 1945.10 1933.7
2	バラード第1番ト短調 Op. 23 (F. Chopin)	※Witold Malcuzyński Artur Rubinstein Vladimir Ashkenazy Vladimir Horowitz Alfred Cortot	TOCE-11221 BVCC-9337 F00L-29020 BVCC8969/70 LHW 001	1962.12 1959.4 1983 1947.5 1929.7
3	幻想曲へ短調 Op. 49 (F. Chopin)	※Witold Malcuzyński Artur Rubinstein Vladimir Ashkenazy Vladimir Horowitz Alfred Cortot	TOCE-11221 BVCC-9341 F00L-29026 PHCP-20601/2 TOCE-7820	1959.7 1962.11 1978 or 1979 1948.2 1933.7
4	ノクターン第2番 変ホ長調 Op. 9-2 (F. Chopin)	※Alexis Weissenberg Artur Rubinstein Vladimir Ashkenazy Vladimir Horowitz Alfred Cortot	TOCE-19030 BVCC-9333 F00L-29017 BVCC8971/72 LHW 001	1968 or 1969 1965.8 1981 or 1982 1957.5 1929.3

※印は「曲を知っているか」という問いの曲提示用に使ったものである。曲提示用の演奏として、4人の演奏家の中からではなく別の演奏家を選んだ意図は、アンケートの続く問いに対して先入観や不平等を生じさせないためである。

3-4) 分析方法

アンケートの回答のうち、大学生に関しては音楽専攻生を別にして集計を行った。なぜなら、音楽専攻生はクラシック音楽を専攻するという意味で明らかに他の被験者とは異質な集団であると考えたからである。また、それぞれの演奏家のテンポのゆらし方(質・量)を客観化するため、CDよりコンピュータに音を取り込み⁽⁶⁾、波形分析⁽⁷⁾を行った。なお、より正確なデータを得るため、演奏データを4倍にのばし測定を行った後、値を1/4に処理して最終のデータとした。

4 調査結果及び考察

4-1) 好きな音楽の種類

4-1-1) 結果

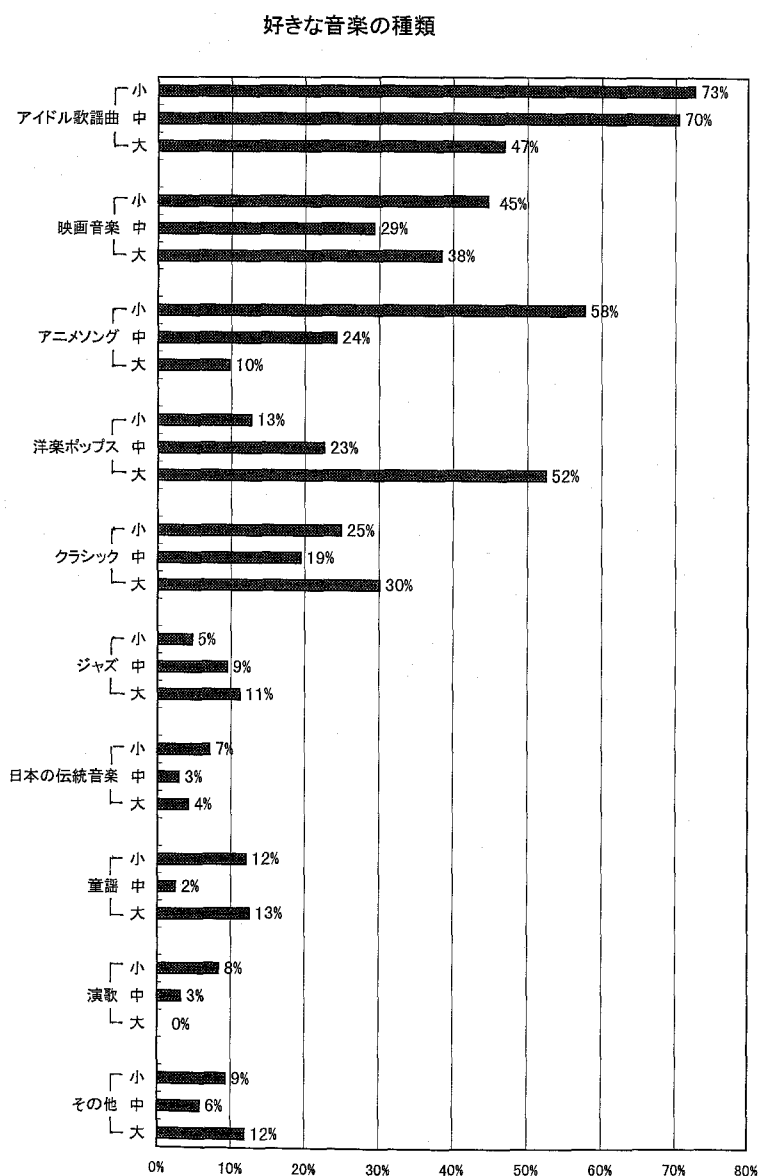
アンケートの【1】の(3)において好きな音楽の種類を複数回答可で設定した。校種別にみる結果は〈グラフ2〉の通りである。

4-1-2) 考察

小学生が好きな音楽の種類は、上位から順にアイドル歌謡曲、アニメソング、映画音楽、クラシックとなっている。中学生の好きな音楽の種類は、上位から順にアイドル歌謡曲、映画音楽、アニメソング、洋楽ポップス、クラシックとなっている。小・中学生においてはアイドル歌謡曲が圧倒的に人気があるのがわかる。一方大学生は、小・中学生と少し違う傾向をみることができる。上位から順に、洋楽ポップス、アイドル歌謡曲、映画音楽、クラシックとなっている。

ところで、同様の調査を昭和56年にNHK放送世論調査所(以下NHK)が、音楽に関する全国調査として行っている⁽⁸⁾。この約20年前の傾向と比

〈グラフ2〉



較し、今回の調査を考察してみた。

このNHKの調査においては、10～14歳（小・中学生の年齢層に相当する）では、全体との差が大きいベスト5に、「テレビマンガ主題歌（+32.0%）」、「テレビドラマ主題歌（+16.6%）」、「コマーシャルソング（+13.2%）」などがあがっている。また、20～24歳（大学生の年齢層に相当する）では、「ニューミュージック（+45.2%）」、「フォークソング（+37.1%）」、「ディスコ（+34.2%）」などがあがっている。今回の調査は、NHKの調査に比べて音楽の分類が大まかであるため、完全な比較をすることはできないが、傾向として20年前の音楽の好みと特段差を見出すことはできなかった。NHKの調査では、若年層が最新流行音楽を好むということが明らかになっており、それは20年経過した現在でも同じ傾向を示している。

また、若年層が「ヤング・アイドル歌手に熱狂するという現象」⁽⁹⁾についても触れており、特に、女性の7～19歳の嗜好率の第1位が「歌謡曲」であり、それがヤング・アイドル歌手の歌であるということが指摘されている。そこで、今回の調査で男女別に好きな音楽の種類の割合を調べてみた。その結果、男女別の割合で最も差の大きかったのは「アイドル歌謡曲」である。男性の54%に比べて、女性は82%にもなっている。このことから、若い女性はいつの時代でもヤング・アイドルに熱狂しやすいということがいえるのではないか。

今回の調査において、少し目をひくのは、大学生の結果においては、小中学生に比べてクラシック音楽を好む割合が増加していることである。これは、大学が選抜された集団であるということから、NHKの調査でいうところの「教養人的」要素がみられるのかもしれない。NHKの調査における学歴別特徴の項目で、大学卒業者がクラシック音楽や外国の音楽を好むことが指摘されている。この点においても20年前の調査と同様の傾向がみられた。なお、音楽の嗜好別にみる音楽表現の感受に関する結果については後述する。（4－5参照）

4－2）最近よく聞いている音楽

4－2－1）結果

アンケートの【1】(4)においてよく聞いている音楽や演奏者の設問については、校種別に〈グラフ3－1〉～〈グラフ3－3〉で示した。

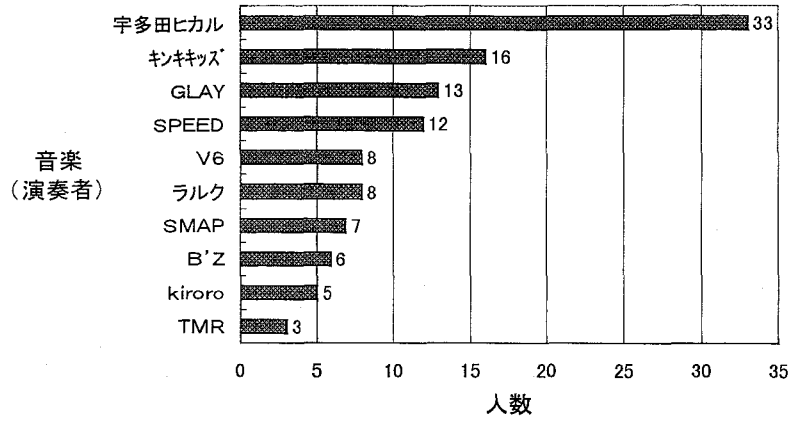
4－2－2）考察

小・中学生の結果をみると、流行に敏感な様子が窺える。自分の好みの音楽を確立しているわけではなく、テレビなどの影響があるのではないかと思われる。これは、前述のNHKの調査でも指摘されていることであって⁽¹⁰⁾、この年代は時代が変わっても、テレビなどからの影響を受けやすいという傾向は変わらない。

それに対して、大学生の結果は小・中学生と様相が異なる。一部小・中学生と重なる曲や演奏者がみられるが、小・中学生とは一味違ったものが選ばれている。小・中学生に比べて、大学生は好みの曲や演奏者がさほど固定化されない傾向にある。このことから、大学生は流行に流されるという面が強いわけではなく、自分の音楽の好みのスタイルをある程度確立しているとも考えられる。

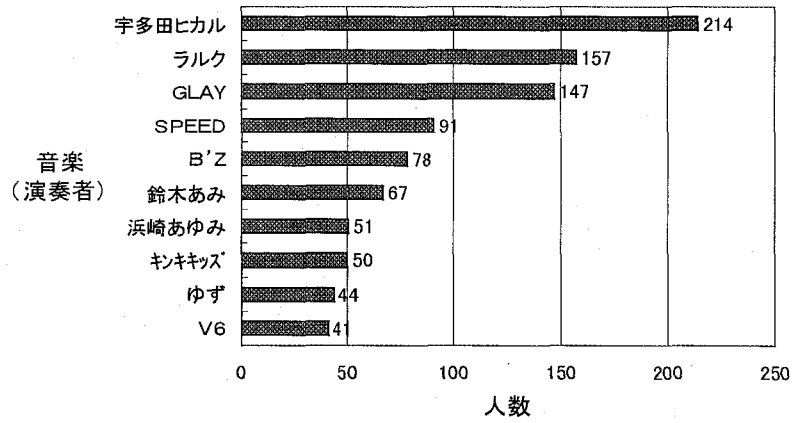
〈グラフ3-1〉

よく聞いている音楽上位10(小学生)



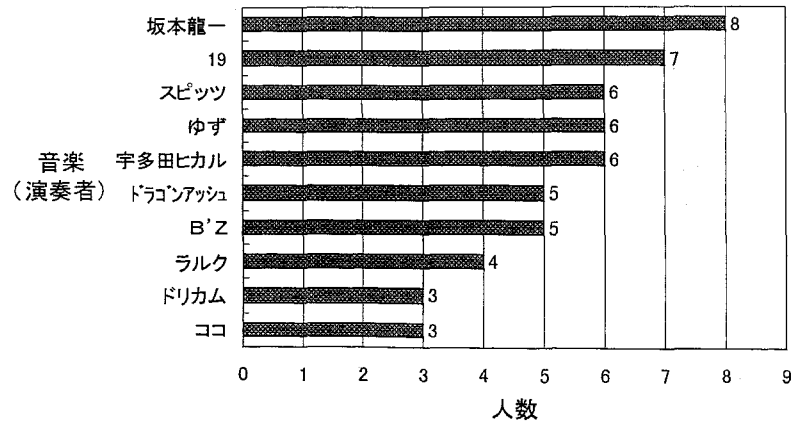
〈グラフ3-2〉

よく聞いている音楽上位10(中学生)



〈グラフ3-3〉

よく聞いている音楽上位10(大学生)



4-3) 校種別にみる結果及び考察

4-3-1) 同演奏を聴き分ける設問の結果 (設問【2】)

(表3)

	1 (誤答) と答えた割合	2 (誤答) と答えた割合	3 (正答) と答えた割合
小学生	7%	5%	88%
中学生	16%	12%	72%
大学生 (一般生)	12%	16%	73%
大学生 (音楽専攻生)	12%	12%	76%

4-3-2) 曲の理解度, 揺れに関する設問の結果 (設問【3】)

4-3-2-1) 問1: 曲の理解度に関する質問の結果

(表4-1) (1) ポロネーズ第6番

	知らない	聞いたことがある	曲名や作曲者を知っている	演奏したことがある
小学生	37%	63%	0%	0%
中学生	20%	79%	1%	0%
大学生 (一般生)	2%	88%	10%	0%
大学生 (音楽専門生)	5%	11%	78%	5%

(表4-2) (2) バラード第1番

	知らない	聞いたことがある	曲名や作曲者を知っている	演奏したことがある
小学生	85%	15%	0%	0%
中学生	87%	13%	0%	0%
大学生 (一般生)	87%	9%	4%	0%
大学生 (音楽専門生)	0%	58%	32%	10%

(表4-3) (3) 幻想曲

	知らない	聞いたことがある	曲名や作曲者を知っている	演奏したことがある
小学生	84%	16%	0%	0%
中学生	91%	9%	0%	0%
大学生 (一般生)	96%	4%	0%	0%
大学生 (音楽専門生)	79%	21%	0%	0%

(表4-4) (4) ノクターン第2番

	知らない	聞いたことがある	曲名や作曲者を知っている	演奏したことがある
小学生	33%	66%	1%	0%
中学生	24%	71%	3%	2%
大学生 (一般生)	8%	69%	13%	10%
大学生 (音楽専門生)	0%	5%	58%	37%

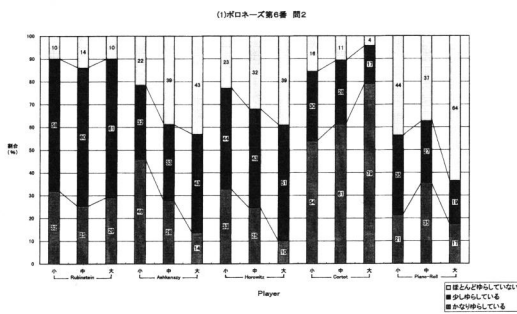
(表5) 波形分析による各演奏家のテンポのデータ

調査項目	曲名	Rubinstein	Ashkenazy	Horowitz	Cortot
平均	ポロネーズ第6番	♩ = 74.4	88.7	88.9	80.4
	バラード第1番	♩ = 171.4	147.4	158.6	178.1
	幻想曲	♩ = 177.0	157.7	181.9	188.5
	ノクターン第2番	♩ = 34.3	45.3	36.5	37.7
最大	ポロネーズ第6番	♩ = 107.7	116.9	114.6	125.8
	バラード第1番	♩ = 293.0	258.6	303.7	327.3
	幻想曲	♩ = 230.3	170.9	216.6	238.8
	ノクターン第2番	♩ = 44.6	56.3	46.4	57.7
最小	ポロネーズ第6番	♩ = 30.5	46.1	37.5	27.6
	バラード第1番	♩ = 54.1	36.7	36.1	25.5
	幻想曲	♩ = 115.8	96.0	150.8	100.9
	ノクターン第2番	♩ = 24.5	23.4	21.9	18.9
SD	ポロネーズ第6番	SD = 15.1	11.9	14.3	20.4
	バラード第1番	SD = 53.8	50.5	64.6	61.1
	幻想曲	SD = 16.2	11.8	15.1	26.0
	ノクターン第2番	SD = 4.1	8.7	5.5	9.5

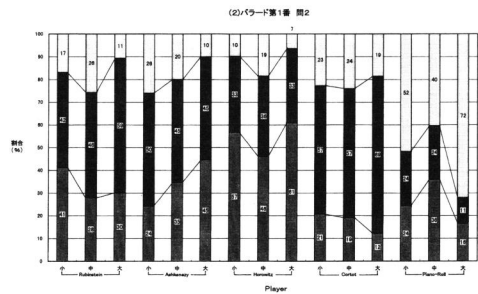
SD の値が大きいほど、絶対的な時間としての「テンポのゆれ」は大きいといえる。

4-3-2-2) ゆれの程度の感知に関する結果

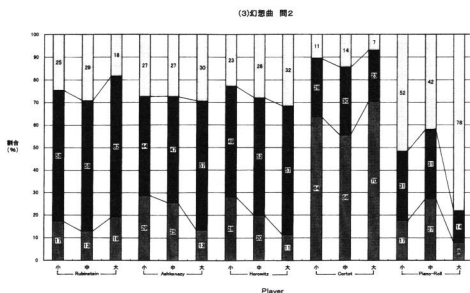
〈グラフ4-1〉



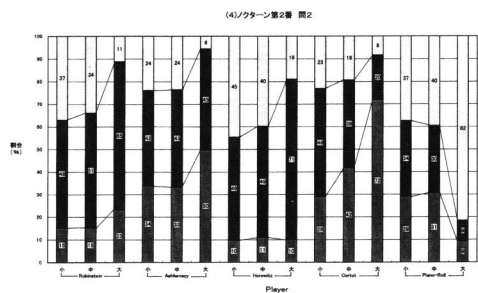
〈グラフ4-2〉



〈グラフ4-3〉

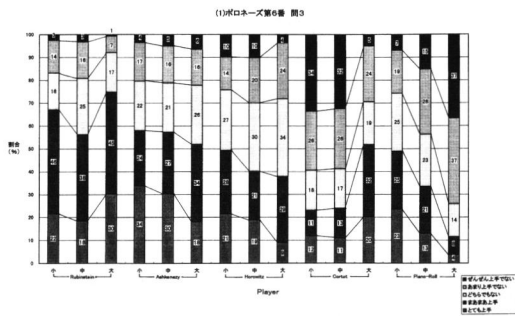


〈グラフ4-4〉

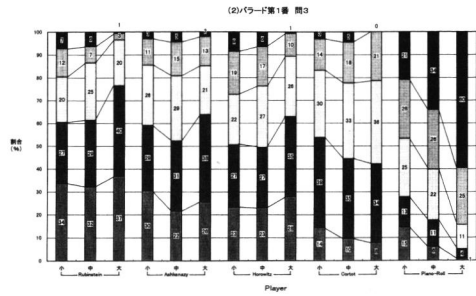


4-3-2-3) ゆれの熟達度に関する結果

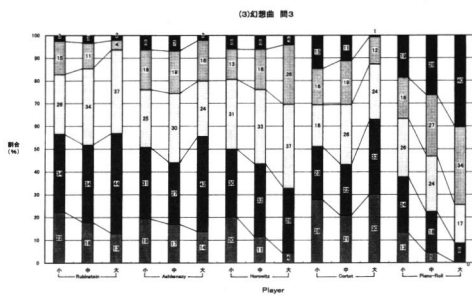
〈グラフ5-1〉



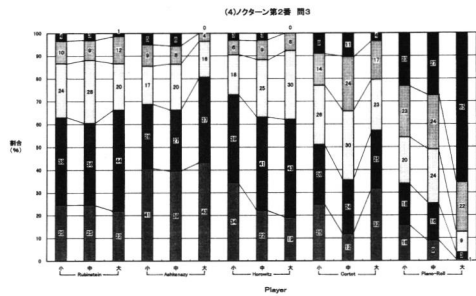
〈グラフ5-2〉



〈グラフ5-3〉

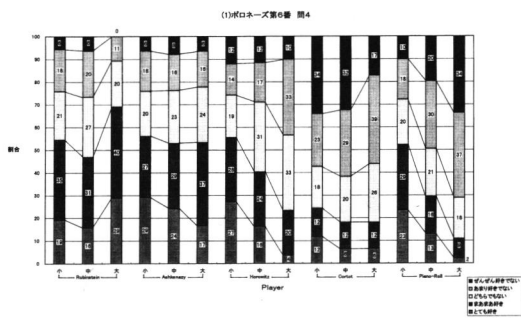


〈グラフ5-4〉

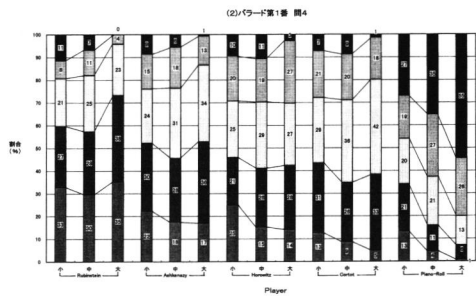


4-3-2-4) 演奏の好みに関する結果

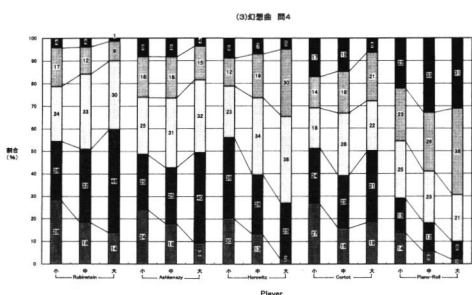
〈グラフ6-1〉



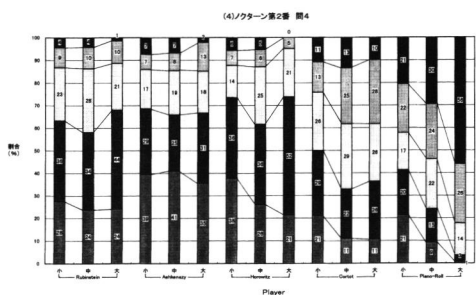
〈グラフ6-2〉



〈グラフ6-3〉



〈グラフ6-4〉



4-3-3) 考察

まず、質問項目【3】の問2の設問「どのくらいゆらしていると感じるか」の結果を校種別にみると、どの曲においても自動演奏に対して、小学生よりも中学生の方が「かなりゆらしている」と感じている。小学生よりも中学生の方が自動演奏に対してテンポのゆれを正しく認識できない割合が高いというのは、問題を感じる点である。これは「テンポのゆれ」ということ自体がわからなかったり、「ゆれ」に対して漠然とした聴き方をしているということが考えられる。

大学生はどの曲においても、小・中学生よりも自動演奏に対してのみでなく、他の演奏家の演奏に対しても「テンポのゆれ」を正しく認識している割合が高い。

ここで問題となるのは、波形分析から導いた「テンポのゆれ」の数値と、実際に被験者が感じている「テンポのゆれ」の大きさがかなり違うものもあるという点である。これは、絶対的なゆれの大きさと、心理的なゆれの大きさには食い違いがあるのではないかとということが想像される。すなわち、テンポのゆれを感知する際には音の絶対的な時間の長さのみではなく、他の音楽的な諸要素も関係しているものと思われる。

問3の「どのくらい上手と思うか」では、すべての曲において自動演奏に対する感じ方が他の演奏家に対する感じ方に比べ、大きな差がみられる。すなわち、年齢が上がるに伴い自動演奏に対して「とても上手」と答える割合が低く、「ぜんぜん上手でない」と答える割合が高くなっている。このことから、年齢が上がるにつれて、音楽的な判断ができていくといえる。

問4の「どのくらい好きか」という設問においても、問3と同じ傾向がみられる。すべての曲において、年齢が上がるに伴い「とても好き」と答える割合が低く、「ぜんぜん好きでない」と答える割合が高くなっている。

問3と問4において、自動演奏に焦点をあててきたが、他の演奏家に対してもある傾向もみることができる。すなわち、大学生は小中学生に比べて、どの演奏家に対しても「ぜんぜん上手でない」、「ぜんぜん好きでない」と答える割合が低くなっていることである。他の4人の演奏家はいずれも大家といわれる人々で、非音楽的な演奏をすることはとても想像できない。これらの演奏家達は違った演奏のスタイルや個性をもちながらも、音楽的な演奏をしているわけで、その演奏を「ぜんぜん上手でない」と判断する割合がかなり少ないということは、演奏家達の良さをきちんと評価できる鑑賞の力をもっている割合が高いということがいえる。

このようにみえてくると、「テンポのゆれ」の感知以外は年齢を追うごとに音楽的判断ができるようになっていくことがわかる。

さて、曲に対する理解度とゆれの程度の感知との相関を、自動演奏の項目を用いて小中大学生別に調べた結果、いずれの場合も「 $r = -0.07 \sim -0.08$ (1%で有意)」の範囲であった。すなわち、曲に対する理解度とゆれの程度の感知との相関を見いだせなかった。このことは、曲のことをよく知っていたり演奏したことがあるからといって、必ずしも「テンポのゆれ」を正しく認識できるというわけではないことを示している。

4-4) 聴取力の差による感知の相違

4-4-1) 同演奏を選択する設問の意義 (設問【2】)

【2】は、提示したものと同一演奏を聞き取り選ぶ設問であるが、この結果については前述

した。(4-3-1参照) この設問において、演奏者の表現方法の違いを聞き取れるか、そして、聞き取れる群と聞き取れない群で、感知に差があるかということ进行调查しようと試みた。ただし、この設問は違いを聞き分けるだけであるので音楽的要素は少ないといえる。

なお、提示した演奏者は Alfred Cortot であり、対照の1番目は Roberto Szidon, 2番目は Samson François, 3番目は Alfred Cortot である。従って、3番が正答となる。1番目の演奏は録音も新しく、テンポのゆれもほとんどないので、提示した演奏と違いが比較的わかりやすい。2番目の演奏は、テンポのゆらし方が、提示した演奏と似た面があり、注意を怠ると間違えやすい。以上のことから、1番を選んだ場合と2番を選んだ場合とでは、間違いの質が違うものと思われる。すなわち、1番を選ぶという間違いの方が2番を選ぶという間違いに比べて、より聴取力がないということになる。

4-4-2) 考察

そこで、【2】に対して、「1」(Szidon) と答えた群、「2」(François) と答えた群、「3」(Cortot) と答えた群に分けて、違いをみてみた。その結果、(1)ポロネーズ第6番の間3以外では大きな差がみられなかった。ちなみに、問3においてみられた違いは自動演奏と Cortot の演奏においてである。(表6参照)

(表6) 問3においてみられた相違

	Cortot の演奏を「とても上手」と答えた割合	自動演奏を「とても上手」と答えた割合
「1」と答えた群	7%	13%
「2」と答えた群	12%	10%
「3」と答えた群	13%	15%

この結果をみると、「2」と答えた群が、非音楽的な判断をしている割合が少ないということになる。しかし、「1」と答えた群は240人、「2」と答えた群は188人、「3」と答えた群は1308人という人数を考えると、この結果の数字が特別な意味合いをもっているとは考えられない。むしろ、他の項目において大きな差がみられなかったということは、この設問が音楽的な意味をもたなかったと考える方が自然である。この項目は、音楽的感受をみるためのものではなく、質問【3】以降で注意力をもって回答に臨んでもらい、より正確なデータを得るための設問である。従って、差が認められなかったという結果は予想されたことでもある。また、全体での正答の割合は約3/4で、大半の被験者が注意力をもって回答に臨んだと考えてよいだろう。

4-5) 音楽嗜好の種類による結果と考察

前述の4-1-1)において、子ども達の好きな音楽の傾向が明らかになったが、音楽の嗜好による感受の差はあるのだろうか。アンケートにおいては音楽の種類を10種類に分類したが、その中から「歌謡曲を好む」群と「クラシック音楽を好む」群に分けて音楽の感受の傾向を調べた。

4-5-1) 結果

まず第一に「歌謡曲を好む」群と「クラシック音楽を好む」群とに分けた。しかし、歌謡曲とクラシック音楽両方を好む者もいるので、第二段階として、「歌謡曲を好むがクラシック音楽を好むわけではない」群と「クラシック音楽を好むが歌謡曲を好むわけではない」群を選び出し、傾向を調べた。その結果、主に自動演奏に対する感じ方に違いがみられた。以下に自動演奏に対する感じ方の結果を示す。なお、対象としたデータは小中大学生の全データである。

(自動演奏に対して)

(表7-1) (1) ポロネーズ第6番

好む音楽	問 2		問 3		問 4	
	かなりゆらしている	ほとんどゆらしていない	とても上手	ぜんぜん上手でない	とても好き	ぜんぜん好きでない
歌謡曲	31%	42%	13%	16%	12%	20%
クラシック	30%	45%	13%	22%	13%	27%
歌謡曲(クラシック除く)	31%	41%	13%	15%	12%	18%
クラシック(歌謡曲除く)	28%	48%	16%	25%	13%	26%

(表7-2) (2) パラード第1番

好む音楽	問 2		問 3		問 4	
	かなりゆらしている	ほとんどゆらしていない	とても上手	ぜんぜん上手でない	とても好き	ぜんぜん好きでない
歌謡曲	32%	46%	7%	35%	6%	37%
クラシック	28%	53%	6%	44%	7%	46%
歌謡曲(クラシック除く)	33%	45%	7%	32%	5%	34%
クラシック(歌謡曲除く)	27%	57%	6%	40%	6%	46%

(表7-3) (3) 幻想曲

好む音楽	問 2		問 3		問 4	
	かなりゆらしている	ほとんどゆらしていない	とても上手	ぜんぜん上手でない	とても好き	ぜんぜん好きでない
歌謡曲	24%	48%	6%	27%	7%	33%
クラシック	20%	57%	5%	34%	6%	33%
歌謡曲(クラシック除く)	24%	47%	6%	25%	7%	32%
クラシック(歌謡曲除く)	14%	69%	4%	39%	4%	31%

(表7-4) (4) ノクターン第2番

好む音楽	問 2		問 3		問 4	
	かなりゆらしている	ほとんどゆらしていない	とても上手	ぜんぜん上手でない	とても好き	ぜんぜん好きでない
歌謡曲	30%	43%	9%	32%	11%	32%
クラシック	23%	55%	9%	29%	10%	30%
歌謡曲(クラシック除く)	31%	41%	9%	29%	10%	30%
クラシック(歌謡曲除く)	15%	62%	4%	44%	7%	46%

4-5-2) 考察

「歌謡曲を好む」群は「クラシックを好む」群よりも、ほとんどの曲において、自動演奏に対して「かなりゆらしている」、「とても上手」、「とても好き」と感じる割合が若干多い傾向がみられる。すなわち「歌謡曲を好む」群の方が、テンポのゆれを感知できなかつたり、非音楽的な感受をする割合がやや高い傾向としてあらわれている。逆に、自動演奏に対して「ほとんどゆらしていない」、「ぜんぜん上手でない」、「ぜんぜん好きでない」と感じる割合は、ほとんどの曲において、「クラシックを好む」群の方が高く、テンポのゆれを感じる事ができたり、音楽的な判断ができる割合が高い傾向がみられる。

「歌謡曲を好むがクラシック音楽を好むわけではない」群と、「クラシック音楽を好むが歌謡曲を好むわけではない」群との感じ方の違いをみると、さらにこの差はポロネーズ第6番とバラード第1番の一部を除いて、大きくなる傾向を示した。

このようにみえてくると、歌謡曲を好む子ども達とクラシックを好む子ども達とでは、音楽的判断に違いがみられる。日常生活の中で、歌謡曲を好む子ども達は当然歌謡曲によく接しているだろうし、クラシックを好む子ども達はクラシック音楽に接する機会は多くなるだろう。諸要素の幅の大きいクラシック音楽に多く接し、かつ微妙な表現に共感していくことで、「ゆれ」を感知することができるようになっていたり、様式に対する判断ができるようになっていくのではないかと推測される。このことから、日常の中でどのような音楽に接していくかということは、音楽的な判断を行う上で（その人の音楽性を形成する上で）、重要であると考えられる。ここでいう音楽的な判断とは、各音楽様式に限定された意味として用いている。

4-6) 音楽歴の差による結果及び考察

4-6-1) 結果

音楽歴について、「音楽歴がある」群と「音楽歴がない」群とに分けて、主に自動演奏に対してどのように感じるか、違いをみてみた。また、「音楽歴がある」群においても、「1年以上3年未満」「3年以上5年未満」「5年以上」の3つの群に分けて、感じ方の違いをみてみた。以下の表は、自動演奏に対する感じ方の差である。

(自動演奏に対して)

(表8-1) (1) ポロネーズ第6番

	問 2		問 3		問 4	
	かなりゆらしている	ほとんどゆらしていない	とても上手	ぜんぜん上手でない	とても好き	ぜんぜん好きでない
音楽歴なし	33%	35%	18%	11%	17%	17%
音楽歴あり	29%	47%	10%	22%	10%	23%
1年以上3年未満	33%	41%	11%	15%	11%	14%
3年以上5年未満	26%	48%	12%	16%	13%	16%
5年以上	27%	52%	8%	28%	8%	32%

(表8-2) (2) バラード第1番

	問 2		問 3		問 4	
	かなりゆらしている	ほとんどゆらしていない	とても上手	ぜんぜん上手でない	とても好き	ぜんぜん好きでない
音楽歴なし	34%	40%	10%	26%	7%	29%
音楽歴あり	29%	51%	5%	42%	5%	44%
1年以上3年未満	36%	42%	4%	32%	5%	38%
3年以上5年未満	26%	52%	9%	37%	8%	36%
5年以上	26%	58%	4%	51%	3%	36%

(表8-3) (3) 幻想曲

	問 2		問 3		問 4	
	かなりゆらしている	ほとんどゆらしていない	とても上手	ぜんぜん上手でない	とても好き	ぜんぜん好きでない
音楽歴なし	25%	40%	8%	21%	8%	28%
音楽歴あり	22%	54%	4%	32%	5%	35%
1年以上3年未満	23%	45%	5%	24%	5%	30%
3年以上5年未満	20%	52%	5%	27%	6%	30%
5年以上	22%	62%	3%	40%	5%	41%

(表8-4) (4) ノクターン第2番

	問 2		問 3		問 4	
	かなりゆらしている	ほとんどゆらしていない	とても上手	ぜんぜん上手でない	とても好き	ぜんぜん好きでない
音楽歴なし	33%	31%	13%	20%	14%	21%
音楽歴あり	24%	55%	6%	41%	9%	41%
1年以上3年未満	25%	46%	9%	28%	10%	30%
3年以上5年未満	32%	41%	5%	32%	11%	33%
5年以上	20%	66%	5%	53%	7%	51%

4-6-2) 考察

いずれの曲においても、「音楽歴がない」群は「音楽歴がある」群よりも自動演奏に対して、「ほとんどゆらしていない」と感じる割合が低く、「かなりゆらしている」と感じる割合が高い。テンポのゆれに対して、「音楽歴がある」群の方が正確に感じ取れているということであろう。また、いずれの曲においても、「音楽歴がない」群は「音楽歴がある」群よりも自動演奏のテンポのゆらし方に対して、「ぜんぜん上手でない」、「ぜんぜん好きでない」と感じる割合が低く、「とても上手」「とても好き」と感じる割合が高い。音楽歴があることにより、音楽的な判断ができる傾向にあることが窺える。

さて、「音楽歴がある」群の中にも、経験の度合いは様々で、小さい頃からずっと楽器を習っている者もいれば、すぐにやめてしまった者もいる。これらの経験の差による相違をみるために、「音楽歴がある」群を「1年以上3年未満」「3年以上5年未満」「5年以上」の3つの群に分けた。そして、それぞれの傾向をみてみると、どの曲に対しても、概ね音楽歴が長

いほどテンポのゆれを正確に感じ取れる割合が高く、音楽的な判断ができる割合が高いことがわかる。

音楽歴の差による自動演奏に対する感じ方の違いをみてきたが、他の演奏家に対しても違った傾向をみることができる。Alfred Cortot の演奏に対する感じ方に相違がある（表9参照）。音楽歴が長くなるにつれて、Alfred Cortot の演奏に対して「とても上手」と答える割合が増えている。また、ポロネーズ第6番に関しては、他の群は自動演奏を「とても上手」と答える割合が Alfred Cortot のそれよりも多いのに対し、「音楽歴5年以上」群は割合が逆転している。

（表9）音楽歴の差による Cortot の演奏に対する評価の相違

	自動演奏「とても上手」と答えた割合 (ポロネーズ6番)	Cortot「とても上手」と答えた割合 (ポロネーズ6番)	Cortot「とても上手」と答えた割合 (ポロネーズ6番)	Cortot「とても上手」答えた割合 (ポロネーズ6番)	Cortot「とても上手」と答えた割合 (ノクターン6番)
音楽歴なし	18%	13%	12%	23%	15%
1年以上3年未満	11%	9%	6%	18%	12%
3年以上5年未満	12%	8%	8%	22%	18%
5年以上	8%	14%	11%	26%	23%

音楽歴が長くなるにつれて、個性の非常に強い Alfred Cortot の演奏法（詳細については『5 演奏者の個性と鑑賞教育』で述べる）に共感を示す割合が高くなっているといえる。

しかし、ここで問題になるのは「音楽歴がない」群も Alfred Cortot の演奏に比較的高い割合で「とても上手」と答えている点である。実は、「音楽歴がなくて Alfred Cortot の演奏をととても上手と感じる」群と「音楽歴が5年以上で Alfred Cortot の演奏をととても上手と感じる」群とでは、音楽性に大きな差がみられるのである。ポロネーズ第6番を例にとり、「音楽歴がなくて Alfred Cortot の演奏をととても上手と感じる」群（以下、A群）「音楽歴が5年以上で Alfred Cortot の演奏をととても上手と感じる」群（以下 B群）の傾向を（表10）で示す。

（表10）「音楽歴がない」群と「音楽歴5年以上」群の相違

	自動演奏を「とても上手」と答えた割合				自動演奏を「ぜんぜん上手でない」と答えた割合			
	ポロネーズ6番	バラード1番	幻想曲	ノクターン2番	ポロネーズ6番	バラード1番	幻想曲	ノクターン2番
A群	19%	19%	11%	24%	11%	25%	20%	16%
B群	3%	0%	3%	3%	38%	59%	43%	60%

（表10）はポロネーズ第6番における例であるが、他の曲で同じように集計してみても、ほぼ同じような結果が得られた。このことから、「音楽歴がなくて Alfred Cortot の演奏を上手だと感じる」群は、音楽的に Alfred Cortot の演奏を上手だと判断しているかどうかは疑わしいといえる。

以上のようにみえてくると、音楽歴の長さがある程度音楽性が高めると考えることができる。言い換えるならば、各演奏家の個性に対する評価をふまえた上で自らの嗜好を実感することができるということになる。

4-7) 自動演奏に対する感じ方の差による結果及び考察

4-7-1) 結果

今までいろいろな観点からアンケートを分析した結果、自動演奏に対する評価に違いがみられることがわかった。それでは、自動演奏に対する評価の差をもとに、分析するとどのような傾向がみられるだろうか。(表11)は、ポロネーズ第6番における自動演奏のテンポのゆれに対して「ほとんどゆらしていないと感じる」群(A群)と「かなりゆらしていると感じる」群(B群)とに分けて分析したもの、「ぜんぜん上手でないと感じる」群(C群)と「とても上手と感じる」群(D群)に分けて分析したもの、「ぜんぜん好きでないと感じる」群(E群)と「とても好き」と感じる群(F群)とに分けて分析したものである。

(表11) 自動演奏に対する評価の違いによる感じ方の相違

曲名	評価	A群 ゆらしていない	B群 ゆらしている	C群 上手でない	D群 上手	E群 好きでない	F群 好き
ポロネーズ 第6番	かなりゆらしている	0%	100%	22%	35%	29%	33%
	ほとんどゆらしていない	100%	0%	62%	27%	52%	33%
	とても上手	9%	16%	0%	100%	5%	46%
	ぜんぜん上手でない	25%	12%	100%	0%	49%	3%
	とても好き	11%	15%	2%	45%	0%	100%
	ぜんぜん好きでない	26%	19%	59%	7%	100%	0%
バラード第 1番	かなりゆらしている	14%	57%	24%	35%	28%	36%
	ほとんどゆらしていない	66%	22%	65%	36%	55%	38%
	とても上手	5%	6%	2%	18%	2%	18%
	ぜんぜん上手でない	41%	33%	71%	17%	67%	18%
	とても好き	4%	5%	2%	15%	2%	19%
	ぜんぜん好きでない	43%	32%	67%	20%	68%	20%
幻想曲	かなりゆらしている	8%	43%	21%	23%	22%	23%
	ほとんどゆらしていない	68%	24%	63%	40%	57%	43%
	とても上手	4%	6%	3%	15%	3%	15%
	ぜんぜん上手でない	35%	23%	60%	11%	54%	17%
	とても好き	5%	8%	2%	15%	3%	22%
	ぜんぜん好きでない	35%	29%	58%	19%	58%	19%
ノクターン 第2番	かなりゆらしている	19%	36%	21%	35%	24%	33%
	ほとんどゆらしていない	60%	32%	60%	32%	53%	33%
	とても上手	7%	11%	3%	21%	6%	20%
	ぜんぜん上手でない	39%	26%	61%	16%	57%	18%
	とても好き	9%	11%	2%	25%	5%	26%
	ぜんぜん好きでない	38%	26%	57%	13%	57%	15%

4-7-2) 考察

まず自動演奏に対して「ほとんどゆらしていないと感じる」群 (A 群) と「かなりゆらしていると感じる」群 (B 群) とでは、どの曲においても A 群の方が自動演奏に対して「とても上手」、「とても好き」と感じる割合が低く、「ぜんぜん上手でない」、「ぜんぜん好きでない」と感じる割合が高い。また、他の曲においても、相対的に A 群の方が自動演奏のテンポのゆれを正しく認識している割合が高く、正しく認識していない割合が低い。このことから、テンポのゆれを正しく認識するということが、音楽的な判断ができることに有効であるといえる。

そして、自動演奏に対して「ぜんぜん上手でないと感じる」群 (C 群) と「とても上手と感じる」群 (D 群) とでは、どの曲においても C 群の方が自動演奏に対して「ほとんどゆらしていない」、「ぜんぜん上手でない」と感じる割合が高く、「かなりゆらしている」、「とても上手」と答える割合が低い。また、他の曲においても、C 群の方が自動演奏に対して、「ぜんぜん上手でない」と答える割合が高い。このことから、C 群の方がテンポのゆれを正しく認識している割合が高いし、音楽的判断ができていく割合が高いといえる。

同じく、自動演奏に対して「ぜんぜん好きでないと感じる」群 (E 群) と「とても好きと感じる」群 (F 群) とでは、どの曲においても E 群の方が自動演奏に対して「ほとんどゆらしていない」、「ぜんぜん上手でない」と答える割合が高く、「かなりゆらしている」、「とても上手」と答える割合が低い。また、他の曲においても、E 群の方が自動演奏に対して、「ぜんぜん好きでない」と答える割合が高い。このことから、E 群の方がテンポのゆれを正しく認識している割合が高いし、音楽的判断ができていく割合が高いといえる。

このようにみえてくると、「テンポのゆれを正しく認識する」、「自動演奏を上手でないと感じる」、「自動演奏を好きでないと感じる」ということは、音楽性として価値があるといえる。

ところで、この三つの価値にも段階があるものと考えられる。A 群と B 群にみられる割合の相違と、C 群と D 群、E 群と F 群にみられる割合の相違には違いがあるのである。すなわち、表11をみると、A 群と B 群にみられる割合の相違よりも、C 群と D 群、E 群と F 群にみられる割合の相違の方が大きいことがわかる。これは、「テンポのゆれを正しく認識する」ということが、聴取的な側面を意味し、また「自動演奏を上手でないと感じる」ことや「自動演奏を好きでないと感じる」ことは、鑑賞的な側面を意味している。

従って、聴取的側面と鑑賞的側面との有機的な関連が鑑賞教育において求められているといえる。「自動演奏のような演奏に対して、何か違和感を感じる」感性こそが求められるべきものであるが、どのようにしてその感性を磨いていくかということについての一例として、著名な演奏例を示しつつ、Tempo rubato などの視点から比較鑑賞法で、提示する方法をあげることができる。

5 演奏家の個性と鑑賞教育

アンケート結果分析において、主に自動演奏を中心にみてきたが、4人の演奏家に対する評価について考察していきたい。

校種別のアンケート結果にもみられるように、全体的な傾向として Alfred Cortot に対する評価は低く、Vladimir Ashkenazy と Aurur Rubinstein に対する評価は高い傾向がみられる。Alfred Cortot に対する評価が低い原因として、次の二つの可能性が考えられる。第一は Al-

(表12) 作曲・演奏の時代様式

時代	作曲・演奏様式	特 徴	代表的な演奏家 (Pianist)
古 ↑	ロマン主義	○心情のままテンポを自由に動かす。 ○情緒色が濃い。	・Vladimir de Pachmann etc.
	表現主義	○不均衡なリズム。 ○テンポを頻繁に変える。 ○メロディーの部分的な強調	・Alfred Cortot ・Artur Schnabel etc.
	新即物主義	○楽譜に忠実。 ○正しいリズム。 ○不変のテンポ。	・Walter Gieseking ・Vladimir Horowitz etc.
↓ 新	偶然性・即興性の時代様式	○即興性や瞬間の燃焼。	・Glenn Gould ・Martha Argerich etc.
	ミニマル・ミュージックの時代様式	○低カロリーでクールな演奏。 ○演奏の技術は高度で、完璧。	・Daniel Barenboim ・Alfred Brendel etc.

fred Cortot の演奏は録音が古く音質が良くない、第二は Alfred Cortot の演奏様式が現代の演奏様式と大きく異なっているということである。柴田南雄氏による作曲・演奏の時代様式に関する説⁽¹¹⁾をもとにまとめると、次の(表12)のように分類される。

この柴田氏の分類によると Alfred Cortot は表現主義、Vladimir Horowitz は新即物主義の演奏の時代様式に属する。Artur Rubinstein, Vladimir Ashkenazy についての記述はないが、Artur Rubinstein は時代としては Vladimir Horowitz と同時代と考えられる。ただ、Artur Rubinstein と Vladimir Horowitz の両極端な音楽性についてはよく指摘されていることであり⁽¹²⁾、同じ時代に属するとはいえ、演奏における個性はずいぶん違ったものがある。すなわち、Artur Rubinstein の演奏は、大変健康的で素朴な印象がある。テンポに関しても、極めて自然なゆらしかたであり、このことが現代の多くの人々に支持される要因だと思われる。

Vladimir Ashkenazy は他の3人の演奏家と比べて随分新しく、(表12)の区分にあてはめると、ミニマル・ミュージックの時代様式に該当すると思われる。Vladimir Ashkenazy の演奏様式は、当然現代に一番近く、時代を反映した演奏は多くの人々に支持される場所となっている。

アンケートの結果からわかるように、現代では比較的癖の少ない Artur Rubinstein や Vladimir Ashkenazy のような演奏が好まれ、テンポを自由にゆらしたりする表現主義のような演奏様式はあまり好まれないことがわかる。

鑑賞の際に、よい録音のものを聴かせるということは、曲を好きになるということの第一歩であると考えられる。また、上手だと感じるような演奏が有効だとする立場からすると、Artur Rubinstein や Vladimir Ashkenazy のように、多くの人から支持される演奏が最初の段階としては用いられるべきであろう。

そして次のステップとして、ゆれの少ない音楽に接することが多くなっている子ども達が、ゆれの大きい個性の強い演奏を全く排除してしまうのではなく、その音楽性を理解できるように道筋を整えていくことは、音楽性を高める上でも大切であると考えられる。なぜならば、冒頭で述べたように、機械的な演奏ではない「ゆれ」のあるところに音楽の芸術性を見出せる場合も多々あるからである。鑑賞教育において、この芸術性へのアプローチを欠いては、音楽教育の

存在理由が希薄となり、ひいては表現活動への転嫁も期待できない。

6 おわりに

これまで、アンケート結果により、いろいろな側面から子ども達の音楽に対するとらえ方をみてきた。音楽の嗜好の傾向としては、約20年前の若年層と同じ傾向がみられたが、中でも大学生の年代では、自らの音楽嗜好が確立することが示された。校種別の結果においては、年齢を追うごとに音楽的判断ができていく傾向にあることがわかった。しかし、「ゆれの程度の感知」に関しては、小学生の方が中学生よりも正確に把握している傾向にあり、この現象は問題点の一つとして今後の課題としたい。音楽の好みの種類による分析においては、歌謡曲よりもクラシックを好む子ども達の方が、やや音楽的な判断ができる傾向にあることがわかった。音楽歴の差による分析では、音楽歴が長くなるほど音楽的な判断ができる傾向にあることがみられた。そして、音楽歴が長くなるほど個性的な演奏にも理解を示す割合が高くなる傾向もみられた。自動演奏に対する感じ方の差による分析では次のようなことが示された。すなわち、無味乾燥な自動演奏のような演奏に対して違和感を感じる感性を育てることが大切であることはいうまでもないが、「テンポのゆれ」を正しく認識でき、自動演奏に対して「上手でない」、「好きでない」と感じられることも音楽性を培う視点として配慮すべきではないかということである。

冒頭で述べたように、近年音楽に接するための様々なメディアが急速に発達してきているし、これからも発達していくことと思われる。そのときに大切なのが、世の中にあふれる様々な音楽に対し、それぞれの音楽様式を認知した上で味わえるかどうかということである。この点は鑑賞教育が担う分野であると考ええる。

註

- (1) 「ニューグローブ世界音楽大辞典」第10巻，講談社，P.54（1994）
なお、今回引用文献中にでてくるレーオポルト・モーツァルトの「Violinschule」にあたることはできなかった。
- (2) 「音楽大事典」第5巻，平凡社，P.2766（1983）
- (3) F. Chopin の曲を演奏する際に、*Tempo rubato* が不可欠であるということは、音楽家にとって自明の理であることと思われる。渡邊氏は次のように述べている。
「ショパンの演奏においてよく言われることの一つに、「テンポ・ルバート」ということがある。これは何もショパンの演奏特有のものではないのだが、その微妙なテンポの揺れ動きはショパンにおいてもっとも特徴的に表れていることは確かである。」渡邊學而，CD『CHOPIN 12 ETUDES』(TOCE-7819)の解説
- (4) Piano control unit PPC 500R で MIDI データを読み込み，YAMAHA SILENT ENSEMBLE PIANO で自動演奏させた。
- (5) 楽譜作成ソフト Encore 4.0を使用。
- (6) Win CDR Ver. 3.10を使用。なお、このソフトで扱えるのはサンプリングレートが44.1kHz，2チャンネルのものに限られる。
- (7) Sound Forge XP Ver. 4を使用。このソフトにおいては、1ms単位の分解能をもつが今回の調査では10msで測定した。
- (8) NHK 放送世論調査所，現代人と音楽，日本放送出版協会（1981）

- (9) 前掲書 (8), P.73
- (10) 前掲書 (8), P.72
- (11) 柴田南雄, 私のレコード談話室. —演奏スタイル昔と今—, 朝日新聞社 (1979)
- (12) Brice Morrison, A Tireless Seeker for Musical Truth, CD『Great Pianists Artur Rubinstein I』における解説では次のように述べられている。
「ホロウィッツとルービンシュタインは両極端の存在であり, 悪魔的な視点と健康的な視点 (その他多くの特徴があげられるが) とを, それぞれに体現している。」

謝 辞 本研究の実施にあたり快くご協力下さいました各校の先生方並びに児童・生徒・学生の皆さんに心からお礼申し上げます。

<参考資料：実施アンケート>

【1】あなた自身のことについて、答えてください。

- (1) 入っている部活動 ()
- (2) 音楽について、経験したことがあるものを答えてください。(経験したことがあるものるものすべてを記入して下さい)
習ったことのある楽器の番号に○をし、()には習った時を書いてください。今も習っている人は、始めた時だけを書いてください。
1. ピ ア ノ (~)
2. 電子オルガン (エレクトーンなど) (~)
3. 歌 または コーラス (~)
4. そ の 他 (~) 楽器名< >
5. 特になし
- (3) あなたの好きな音楽の種類について、あてはまるものをいくつでも選んで○をつけてください。
1. 日本の伝統音楽 2. 童謡 3. 洋楽ポップス 4. クラシック 5. アイドル歌謡曲
6. アニメソング 7. ジャズ 8. 映画音楽 9. 演歌 10. その他 ()
- (4) 最近あなたがよくさいている曲や演奏している人を書いてください。
() () ()

【2】これから鑑賞するものと同じ演奏を選んでください。まず、曲をさいてください。

曲をさいたら、今の演奏と同じものを下の1番から3番の中から選んで○をつけてください。

1. 1番目 2. 2番目 3. 3番目

【3】これから4曲、曲の一部をさいてもらいますが、それぞれあてはまるものの番号を○で囲んでください。

(1) まず、1曲目です。それでは、曲をさいてください。

問1. この曲について、あてはまるものの番号に○をしてください。曲の題名や、作曲者などを知っている人は()に知っていることを書いてください。

1. 知らない。 2. 聞いたことがある 3. 曲名や作曲者を知っている。
4. 演奏したことがある。

問2. それでは、同じ曲を5人の違う演奏者の演奏でさいてもらいます。どのくらい、テンポをゆらししていると感じるか(どのくらい曲のはやさをかえたり、のびちぢみさせているか)あてはまる番号に○をしてください。

かなりゆらししている すこしゆらししている ほとんどゆらししていない

1. 1番目の演奏 1 _____ 2 _____ 3 _____
2. 2番目の演奏 1 _____ 2 _____ 3 _____
3. 3番目の演奏 1 _____ 2 _____ 3 _____
4. 4番目の演奏 1 _____ 2 _____ 3 _____
5. 5番目の演奏 1 _____ 2 _____ 3 _____

問3. もう一度、5人の演奏をさいてもらいます。今度は、テンポのゆらし方(曲のはやさの変わり方、のびちぢみ)について、どのくらい上手だと思うか、あてはまるところに○をしてください。

とても上手 まあまあ上手 どちらでもない あまり上手 ぜんぜん上手
ではない でない

1. 1番目の演奏 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 _____
2. 2番目の演奏 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 _____
3. 3番目の演奏 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 _____
4. 4番目の演奏 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 _____
5. 5番目の演奏 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 _____

問4. 次に、同じ曲を5人の違う演奏者の演奏で、さいてもらいます。それぞれの演奏のしかたが、どのくらい好きかあてはまるところに○をしてください。

とても好き まあまあ好き どちらでもない あまり好き ぜんぜん好き
ではない でない

1. 1番目の演奏 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 _____
2. 2番目の演奏 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 _____
3. 3番目の演奏 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 _____
4. 4番目の演奏 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 _____
5. 5番目の演奏 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 _____

<以下同様の内容につき省略>